

閉じこめられる「アイヌ文学」

被封閉的「愛努文學」

The Occluded "Ainu Literature"

新井Kaorinda 北海道大学アイヌ・先住民研究センター 研究員
黃柏豪 翻譯



はじめに

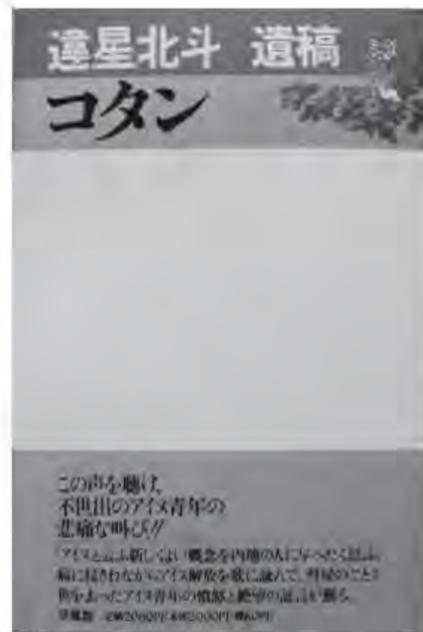
通常言われる「アイヌ文学」とは、アイヌに伝えられている口承文芸全般を指し、アイヌ語のもの、と概念される。

この場合の口承文芸は、「yukar(ユカラ)」などアイヌ語の古語や雅語で語られた英雄叙事詩のみならず、日常生活の中で行われた歌謡などまでも含まれる。つまり、アイヌ語であればほとんど全てが「文学」であるのだ。通常「日本文学」は歌謡曲などを含んで概念されないので、この場合の「アイヌ文学」の定義は異質なものと言えよう。しかも英雄叙事詩「yukar(ユカラ)」に至っては、金田一京助(きんだいちきょうすけ)(1882~1971)によって、イリアス、オデュッセイアに並ぶ三大叙事詩として、「世界」に連なるものとして位置付けられ、「日本文学」からは排除される。

前言

通常所說的「愛努文學」此概念，是指傳承在愛努民族的所有口傳文學，並且為愛努語的作品。

這個場合所說的口傳文學，不單單只指「yukar」等等以愛努語的古語及雅語來敘述的英雄敘事詩，也包括了所有日常生活中所傳唱的歌謠等等。換句話說，只要是愛努語，幾乎所有的事物都會是「文學」。通常「日本文學」的概念中並不包括歌謠曲等等，故這個場合的「愛努文學」定義也可說是一種異質的定義。甚至英雄敘事詩「yukar」藉由金田一京助(1882~1971)之手，做為和伊利亞德、奧德賽並列的三大敘事詩之一，列席於「世界」，但卻被排除在「日本文學」之外。



◀ 著名的「愛努文学」作品。

一方で、近代以降にアイヌ自身の手によって、「日本語」で書かれた詩、小説、散文、社会批評などの多くは「アイヌ文学」のうちに含めて考えられていない。その場合でも、アイヌ自身の手になるものと、アイヌならざる者が「アイヌ」をモチーフにした文学は、区別されない場合も多い。

「アイヌ文学」についてはいまだこのような概念上・定義上の混乱がある。

口承文芸の文学化

「1875年の樺太・千島交換条約、1879年の琉球処分により、近代日本の領土が確定」して「帝国」が出現し、「確定したばかりの人間を、いかなる人種として表出していくのか」という問題が生じ、「日本人類学」が勃興した[富山：1994]。それと同じ構図で「日本語」とは何かという問いが生じ、「国語」の研究に資するために、周辺民族の比較言語学による研究が進められた。アイヌ語研究もその一環である[丸山：2002]。

另外，近代以後由愛努民族自己以「日本語」所寫作的詩、小説、散文、社會評論等等皆被認為不包括在「愛努文学」之中。在這個場合，愛努民族自己所創作的，和非愛努民族的人們以「愛努」做為主題所創作的文學，不被區別の場合也相當多。

關於「愛努文学」目前還有如上所述的概念上、定義上的混亂。

口傳文學的文学化

「藉由1875年的樺太・千島交換條約以及1879年的琉球處分，確定了近代日本的領土」後，「帝國」出現，產生了「剛被定義的人們，該做為何種人種來表現」這樣的問題，「日本人類學」也就此勃興[富山：1994]。此後更產生了何謂「日本語」這樣與前者有著相同構圖的問題，而為了協助研究「國語」，藉由周邊民族的比較語言學所進行的研究開始推展。愛努語的研究也是其中的一環[丸山：2002]。

その中で文字による筆記が無かったアイヌの口承文芸は金田一によって「文学」とされた。当時アイヌは「優勝劣敗の法則」によって「滅びゆくもの」とされており、その言説は「日本人」による北海道の植民地化を正当化した。そのように賤しめられた民族の言語研究には、「文学」としての「権威」が必要だったのではないか。ともあれ金田一は論文「アイヌ叙事詩 yukar の研究」によって 1932 年に帝国学士院恩賜賞を得、アイヌ語の研究はアカデミズムにその場所を与えられる。

金田一はアイヌ語研究に打ち込み、大げさな修辭で「同情」に満ちた視線をアイヌに向け一方、植民地化の結果、現実のアイヌにおきている窮状には目を向けないことは、よく指摘される。金田一にとってアイヌ語は「『未開』のまま現在に伝承されてきた」ので「発展がない。なぜならアイヌが『未開の民族』であるから」[丸山：2002]。「アイヌ」は古来の姿を残した進歩のない非歴史的な存在とされ、現状をその視線から排除する、このような金田一の姿勢にはアイヌに対する差別が見出せてしまう。日本のアイヌ語研究はこのような基礎の上に始められたものなのである。

アイヌ自身の手による日本語のアイヌ文学

アイヌによる最初の著述としては、1913 年出版の山辺安之(やまのべやすのすけ)の「あいぬ物語」(博文館)が知られている[石原：2005]が、

其中沒有文字記錄的愛努口傳文學被金田一視為「文學」。當時的愛努民族在「優勝劣敗的法則」中被視為「步向滅亡的人們」，該言論正當化了由「日本人」所進行的北海道植民地化。研究如此被賤視的民族語言，是不是需要一個「文學」上的「權威」？總之金田一藉由他的論文「愛努敘事詩 yukar 的研究」在 1932 年得到了帝國學士院恩賜賞，愛努語的研究在學院派的研究下得到了它的居處。

金田一熱中於愛努語研究，在以誇張的修辭對愛努民族投以充滿「同情」的眼光時，另一方面，卻時常被指出，他對於植民地化的結果所造成的愛努民族在現實中所處的窘境，卻從未著眼。對金田一而言，愛努語是「保持『未開化』的狀態傳承至今」，因此「沒有發展性。畢竟愛努民族是一支『未開化的民族』」[丸山：2002]。「愛努民族」被他視為一個保留著自古以來的樣子並且沒有進步，非歷史的存在，現狀被排除在他的視野之外，從金田一這樣的姿態，可以看出他對愛努民族的歧視。日本的愛努語研究就是在這樣的基礎上開始的。

由愛努民族所創作的日本語愛努文學

最初由愛努民族所作的著述，有 1913 年出版的山邊安之助「あいぬ物語(愛努故事)」(博文館)為我們所知[石原：2005]，

閉じこめられる「アイヌ文学」

この著書は山辺から聞き取りをした金田一京助によって書かれている。金田一の凡例によると、「著者山辺君は日本語が上手」ではあるが「アイヌ語は語彙が貧弱」であるので「かえって山辺君の日本語をそのまま記したほうが良かったのかもしれない」としながら、「それではアイヌの著作と信ぜられまい」ので「比較的不得意なアイヌ語をわざと選んでこれを話してもらった」ということである。

アイヌに対するこのようなアイヌ語の圧倒的な重視は、必然的にアイヌの手で書かれた日本語の文学への軽視を生む。久保寺逸彦(くぼでらいつひこ)(1902~1971)に至っては、アイヌ語でなければ『アイヌ文学』などという呼称そのものは存在し得ないことになる」と断じているほどに。

もとより近代アイヌは民族としても混ざっており、どこにも「純粋なアイヌなる存在」はいない。アイヌ語も然りで、すでに山辺の時代から「アイヌ」にとって「日本語」が「母語」であるのだ。このような状況で「アイヌ」にアイヌ語の著述ばかりを求められるとすれば、それは一つの固定化された非歴史的な措置によって「アイヌ」を測り、実際には多様な存在である「アイヌ」の在り方を抑圧しかねない。

しかしアイヌ語がアイヌから奪われても、アイヌに対する厳しい差別は社会に存在し続け、その中を「アイヌと周囲から眼差される者たち」は生

此著作が金田一京助抄寫下由山邊所口述的故事而成。據金田一の注釋，雖然「作者的的山邊先生很擅長日本語」，但是因為「愛努語缺乏語彙」，因此雖認為「把山邊先生說的日語保持原樣記錄下來說不定比較好」，可是「這樣就無法使人信服這是愛努民族的著作」，故「故意挑選了他相對較不擅長的愛努語來請他述說」。

相對於愛努民族，對愛努語壓倒性的重視，必然會產生對愛努民族之手所書寫的日語文學的輕視。甚至到了久保寺逸彦(1902~1971)，斷言到如果不是愛努語，『愛努文學』等此一稱呼的事物根本不存在」的程度。

原本近代愛努民族也是一個混合的民族，不管在那裡都沒有「純粹的愛努民族的存在」。愛努語也是如此，在山邊的時代對「愛努民族」而言「日本語」已經是「母語」了。在這樣的狀況下對「愛努民族」只要求他們從事愛努語的著述的話，那只是藉由一個固定化了的非歷史性的設定來測量「愛努民族」，只會壓抑了「愛努民族」在實際上做為一個多樣化的存在時其該有的樣子。

但就算愛努語已從愛努民族身上被奪走，對於愛努民族的嚴重歧視仍然持續存在於社會當中，而「愛努民族和被周圍注視的

き抜かなければならない。表現に際しては、アイヌ語は流暢ではないかあるいは習得できず、日本語ではアイヌの感情を表現する幅が熟していない。二言語の狭間にあつて「アイヌ」の表現者たちは呻くのだ。

彼・彼女ら「アイヌ」による日本語の文学は、短歌や散文、社会評論の形を取るものが多い。それら「アイヌ文学」は日本文学史でほとんど等閑視され、アイヌを語る際に限定されて、社会的に位置付けられるのみである。

そのような扱われかたは、現在の、アイヌの文化振興においてアイヌ語学習が偏重されて、アイヌには想像上の「アイヌらしい」存(あ)り方を求められる一方、例えば、あるがままの「アイヌらしくない」生き方をするものは「アイヌ」ではないもの、として周辺化されるような取扱われ方と、相似形をなしているように思える。

「アイヌ文学」の定義

筆者はここで「アイヌという状況に在るものたち」がその状況で生まれるものを、何語であれ記すものを、「アイヌ文学」としたい。また、「アイヌという状況に置かれない者」によって「アイヌ」が単に文芸上のモチーフとして利用されるものを「アイヌ文学」に含めるのには同意しない。両方の作者のポジションを同一にしてしまうことは、「アイ

人門」不在此中存活下來不行。在進行創作時，因愛努語不流暢或無法學習，而日本語也尚未成熟至可以表現愛努民族的感情的程度。「愛努民族」的創作者正在兩個語言的夾縫間呻吟。

由他們、她們「愛努民族」所創作的日本語文學，多取短歌及散文、社會評論等的形式。在日本文學史上幾乎都視這些「愛努文學」為無物，只有限定在敘述愛努語時，才被賦予社會學性質的位置。

像這樣的處理方式，和現在振興愛努文化時，偏重愛努語的學習，對愛努民族要求在想像上的「像愛努民族」的樣子——也就是說，保持原來樣子「不像愛努民族的」的生活方式的人們不是「愛努民族」的一員，如此被邊緣化的對待方式——讓人不禁覺得兩者形成了一對相似的圖形。

「愛努文學」的定義

筆者在此想要把「居於愛努民族此一狀況當中的人們」在此一狀況當中所產生出來的事物，不管是何語只要將其記錄下來，都做為「愛努文學」來看待。又，筆者不同意把由「不居於愛努民族此一狀況當中的人們」以「愛努民族」做為文藝上的一個主題所創作的事物包含在「愛努文學」

閉じこめられる「アイヌ文学」

ヌ」に対する侵犯になりかねないからだ。

違星北斗(いぼしほくと)(1901~1929)のように内面化された被差別意識に悩みながら、バチエラー八重子(やえこ)(1884~1962)の詠うような「アイヌと眼差される者」が生きにくい現状が、いまだに続いていながらも、グローバル化を受けて多様化が進行している、そのように複雑な現状を抑圧しないためにも。

付記：アイヌの手になる著名な「アイヌ文学」

*著書は初版発行年、出版社は当時のもので幾度もの復刊を経、出版社が変更している場合も多い。

・口承文芸

知里幸恵ちりゆきえ「アイヌ神謡集」郷土研究社、一九二三年

・短歌

バチエラー八重子(やえこ)「若きウタリに」東京堂、一九三一年[訳注：ウタリとは同胞の意味]

違星北斗(いぼしほくと)「違星北斗遺稿 コタン」希望社、一九三〇年[訳注：コタンとは村落の意味]

森竹竹市(もりたけたけいち)「若きアイヌの詩集 原始林」白老・ピリカ詩社、一九三七年[訳注：ピリカとは美しい・すばらしいの意味]

・現代詩

戸塚美奈子(とつかみなこ)「一九七三年ある日ある時に」創映出版、一九八一年

・小説

鳩沢佐美夫(はとざわさみお)「遺稿集 若きアイヌの魂」新人物往来社、一九七二年

當中。把兩方作者的立場視為同一，只是對於「愛努民族」的一種侵犯罷了。

如違星北斗(1901~1929)一般的煩惱著內化的被歧視意識，如 Batchelor 八重子(1884~1962)其所詠嘆的「愛努民族和被周圍注視的人們」難以生存的現狀，至今仍然持續著，並且為了不壓抑如此複雜的現狀，接受了全球化的影響，並持續朝向多樣化成長。

附記：由愛努之手所成的著名「愛努文學」

*所列為初版發行年，當時的出版社在經過數度重新發行後，出版社改變了的情形也相當多。

・口傳文學

知里幸恵「愛努神謡集」郷土研究社、一九二三年

・短歌

Batchelor 八重子「給年輕的 Utari」東京堂、一九三一年[原譯註：Utari 意為同胞]

違星北斗「違星北斗遺稿 Kotan」希望社、一九三〇年[原譯註：Kotan 意為村落]

森竹竹市「青年愛努人的詩集 原始林」白老・Pirika 詩社、一九三七年[原文譯註：Pirika 意為美麗、完美]

・現代詩

戸塚美奈子「在一九三七年的某天某時」創映出版、一九八一年

・小説

鳩沢佐美夫「遺稿集 年輕的愛努靈魂」新人物往来社、一九七二年

・エッセイ

萱野茂(かやのしげる)「おれの二風谷」すずさわ書店、一九七五年

・社会評論

貝澤藤藏(かいざわとうぞう)「アイヌの叫び」アイヌの叫び刊行会、一九三一年

荒井源次郎(あらいげんじろう)「アイヌの叫び」北海道出版企画センター、一九八四年

参考文献

石原誠(いしはらまこと)「アイヌ民族自身による著作について」『平成16年度 普及啓発セミナー報告集』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構、二〇〇五年

奥田統巳(おくだおさみ)「アイヌ文学」『岩波講座 日本文学史 第17巻日本文学2・アイヌ文学』岩波書店、一九九七年

富山一郎(とみやまいちろう)「国民の誕生と『日本人種』」『思想 145号』岩波書店、一九九四年

丸山隆司(まるやまたかし)「<アイヌ学>の誕生 金田一と知里と」彩流社、二〇〇二年

自己紹介

新井かおりんだ 1966年、埼玉県生まれ。北京大学中国文学部卒業、立教大学社会学大学院博士課程前期在学中。北海道大学、アイヌ・先住民研究センター研究員。現在はアイヌ民族復権運動の活動家だった祖父・貝澤正について論文を執筆中、来年6月に御茶ノ水書房より「思想としてのアイヌへ」の一部として出版予定。

・散文

萱野茂「我的二風谷」鈴澤書店、一九七五年

・社会評論

貝澤藤藏「愛努的呐喊」愛努的呐喊刊行会、一九三一年

荒井源次郎「愛努的呐喊」北海道出版企画センター、一九八四年

参考文献

石原誠「關於由愛努民族自身所成之著作」『平成16年度 普及啓発專題討論會報告集』財団法人愛努文化振興・研究推廣機構、二〇〇五年

奥田統巳「愛努文學」『岩波講座 日本文学史 第17巻日本文学2・愛努文學』岩波書店、一九九七年

富山一郎「國民的誕生與『日本人種』」『思想 145号』岩波書店、一九九四年
丸山隆司「<愛努學>の誕生 金田一和知里」彩流社、二〇〇二年



◀ 知里幸恵「愛努神謡集」の注解。(北道邦彦編注)

自我紹介

新井 Kaorinda, 1966年生於埼玉縣。畢業於北京大學中國文學系，立教大學社會學系大學部博士課程前期在學中。北海道大學、愛努・先住民研究中心研究員。現在正執筆寫作關於曾是愛努民族復権運動家的祖父——貝澤正的論文，預定於明年六月將做為御茶水書房「獻給做為思想的愛努」中的一部分出版。